

三四名は完全治療をほどこし、咀嚼能力を回復すべく義歯まで装着した。またB群四〇名はそのままの状態で放置しておきその後四か月間の体重増加の状態を観察した。もちろん八三名の幼児たちの中には実験開始時平均体重より劣る者が多かった。実験開始後四か月目に両群の体重増加をしらべてみると、A群は平均一・七六kgの増加を示し、B群は〇・四八kgの増加をきたしていた。

## 日本人小児の体位向上に 関する統計的考察

日本女子大学 長竹正春  
加藤翠

**目的** 日本人の体位は第二次大戦による生活環境低下の一時期をぞいて、年々向上してきているが、それが経時の、性別ならびに年令的に、どのような傾向をもって向上してきているかについて、文部省の学生、生徒、児童の発育統計を中心として統計的に考察を試みた。

**研究方法**

明治年間からの標準値が出ているので、主として文部省の発育年次統計について、また厚生省国民栄養調査成績などについて統計的吟味をおこなった。代表年次として、明治三三年（最も統計上古いもの）大正二年、昭和二年、十一年、二三年、二八年、三十年をえらんだ。身長・体重・胸囲について、各年次の六才より二四才までの発育曲線の違いについて検討した。各年令の身体計測値が、明治年間より今日までどのような向上を示したかを検討した。

昭和三一年の各年令の計測値を一〇〇として、それ以前の代表年次の各年令の計測値の%を求め検討した。

昭和三一年の各年令の計測値とそれ以前の代表年次の各年令の計

測値の差について、Standard Score を求めて検討した。

その他給食状況、疾患率など、体格の向上を裏付けると思われる事項について検討を加えた。

### 調査結果の主なるもの

- 1 日本人小児の体位は年々向上の傾向にあるが、この傾向は身長に一番顕著に見られ、体重、胸囲の順につづく。女子は男子より向上の度が著明のようである。体位向上は青年前期に顕著で、女子の方が男子よりこの時期が早いようである。
- 2 戰争の影響による体位の低下は発育期のどの年令にも見られるが、一二一四才の青年前期にこの傾向が目立ち、女子より男子に影響が大であったようである。また戦争の影響は、体重に一番はつきりあらわれており、身長、胸囲の順であった。

## 小児の栄養方法と 知能発達に関する一考察（第二報）

——地方幼児および都会労働者階級幼児を対象とする——

日本女子大学 武藤静子

高神弘子

本研究は、第十一回大会において先に発表したものとの追補であつて、昨年度対象児が都會中流以上の家庭に偏した為、本年は炭坑五〇名、漁村五〇名、農村五〇名、および都會労働者階級五〇名の計二〇〇名の幼児を対象として、乳幼児時代にとられた栄養方法と、知能発達について調べたものである。調査方法は、田中びねー個別知

能検査、身体測定、および書きこみ法による栄養に関する調査をおこなった。知能分布はプリントを参照されたい。

調査結果の主なものを次に示す。

1、出生時における父母の年令と知能との関係は、地方に比し都会の方が遅く子どもが出生している傾向があり、昨年の結果と同様知能の高い子どものグループほど、父母の出産適令期に、子どもが出生している傾向があるようであった。

2、出生順位から見ると、知能の高いグループにひとりっ子、長子が多い傾向が見られた。

3、妊娠中母親の栄養、離乳食に対する配慮、果汁、肝油の添加など発育に対する栄養上の配慮は、知能の高いグループの方が、低いグループより、いきどいているという結果が出た。

4、離乳の開始時期、乳をすつかり放した時期は、知能の高いグループが低いグループより早くおこなわれている傾向が見られた。

5、現在の食生活と知能との関係は、現在の食生活状態の良い者が、知能の高いグループに多く見られた。

6、出生時体重は、知能と関係が見られるようであったが、現在体重とはその関係がはつきりしなかった。

## 幼稚園における拒食児の一治療 例ならびに人格形成について

お茶の水女子大学

平井信義

千羽喜代子

愛育研究所 野田幸江

五日間の合宿において、良効な治療成績をおさめた一拒食児の症

### 例報告

**主訴** 五才十一ヶ月の女児、幼稚園で友たち遊びもせず、皆と一緒に机で食事をする事を嫌う。一方家庭においても、他人が入ると、ひとり別の部屋での食事を要求するなど、社会性の無さを訴えて母親が相談に来所。

**治療方針** 本児の問題行動が決して negative なものではなく、環境から培われたものであるとの見解から、親からの isolate およびそれにともなう independence が、これら ever protection にない子供たちに何らかの良い影響を与えるのではないか、と目的でおこなわれた合宿に参加させ、集団生活の rule に従わせることによって自我の抑制の為の training をおこなう。

**治療経過** 第一日の拒食にも、とりあわざにいると、二日目からは時々おかげが気にいらぬとの理由で拒むことはあったが、皆と一つの食卓をかこみ食事をするようになり、また一回目には、泣き叫び抵抗した入浴も、一度入れられてからは、それ程の抵抗もなく入るようになった。と同時に、行動も除々にてはあったが活潑さを増し、四日目には、おとなを混えてではあつたが友だちとふざけ、大きな声を出すようになった。

**考察** このような短期間の治療成功について二、三の問題点をとりあげてみるならば、第一に、診断が妥当であったこと、そして、それが四六時中同じ situation の中でおこなわれたこと、寝食を共にするという条件の中で治療者と非治療者の間に rapport の成立が十分におこなわれていたことなどがあげられよう。そのような条件の中で体験した快経験が、またそれをやりとげたという自信が一つの洞察となつて外界への normal な適応を誘致したものと見れる。